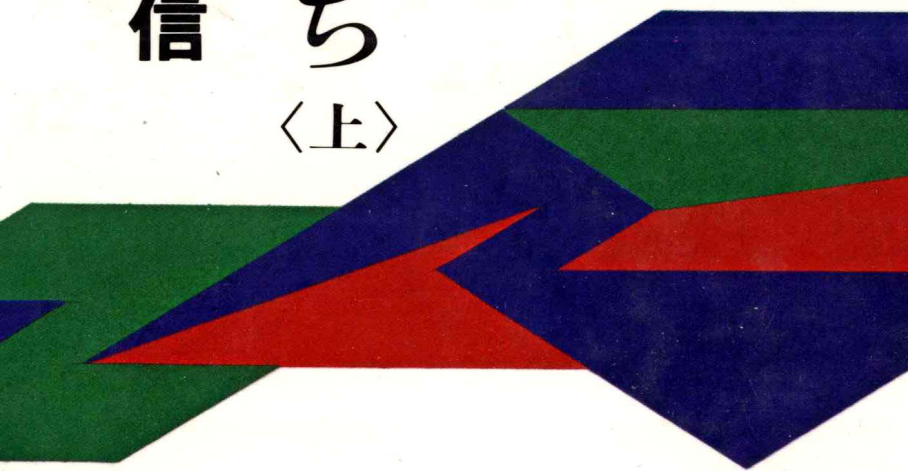


現代の詩人たち

〈上〉

大岡信



現代の詩人たち

〈上〉

大岡
信

現代の詩人たち へ上

©Makoto Ooka, 1981

一九八一年五月二〇日印刷

一九八一年五月二九日発行 1092-40093-3978

著 者——大岡 信

発行者——清水康雄

発行所——青土社

東京都千代田区神田神保町一―二九 市瀬ビル 二101

☎二九一―九八三一（編集）二九四―七八二九（営業）

印刷所——第一印刷所／大日本印刷

製本所——美成社

装 幀——榎本和子

目次

石川啄木	空想の詩から「食ふべき詩」へ	7
室生犀星		41
佐藤春夫		61
高村光太郎	官能性と絶対志向と	85
川上澄生	哀歎の詩人	89
尾形亀之助	寸感 底をつくということ	97
草野心平	天の思想	105
一九五二年二月の堀辰雄論		123
福永武彦	『ある青春』『夜』『死と転生』	129
井伏鱒二の詩		133
中野重治	「のに」のこと	157
おもに金子光晴の散文のこと		163
大岡昇平	「無垢」と「小宇宙」への夢	169
吉田健一	荒地を越えて	183

- 菱山修三 現代詩史の中での位置 191
- 瀧口修造 詩と詩人 197
- 西脇順三郎 ヴィジョンと音 219
- 鮎川信夫 詩と詩論 235
- 田村隆一 形式と感情の質 263
- 石原吉郎の一篇をとって 「墓」解説私案 275
- 安東次男 「読み」と「作」の根本原理 279
- 吉野弘 初期詩篇論 311
- 入沢康夫 『わが出雲・わが鎮魂』への各章対応を志す伴奏的称讃 325
- 辻井喬 孤独者の朝と夕べのうた 335
- 栗田勇 『伝統の逆説』『サボテン』『現代の空間』 345
- 那珂太郎 出会いのころ 351
- 伊達得夫 書かなかった詩人 書いた編集者 355
- 重田徳 『清代社会経済史研究』著者逸聞 377

現代の詩人たち へよ

石川啄木 空想の詩から「食ふべき詩」へ

I

啄木についての最も古い思い出のひとつは、旧制高校の一年生だった時、同室の友人と啄木是非論をたたかわせたことである。その友人は北海道に生れ育った在日朝鮮人金太中で、のち『囚われの街』という一冊の詩集を出したが、今は詩作を廃したらしい。

私は中学時代から詩を書きはじめていたため、すでにいっばし生意気な文学少年になっていて、金と啄木是か非かを論じあつたとき、否定する立場に立ったのはもちろん私の方だった。

「なんだいあんなセンチな歌！」

金がそのときどんな主張をして啄木を擁護したか、今ではほとんどおぼえていないが、理窟なんかおれは知らないよ、しかし啄木の歌はすばらしいじゃないか、どうしてあのすばらしい歌を

つまらないなんて言えるのか、とくりかえし彼が言い放ったことだけはたしかである。金は立派な体格で、声がよく徹り、音吐朗々という形容がこれほどしっくりくるやつも少ないと感じさせる堂々たる朗読をした。啄木の歌を彼が愛した理由のひとつもそこにあったのかもしれない。啄木の歌は彼の声帯に乗るとき、とりわけすばらしく聞こえたからである。

しかし、フランス文学かぶれ、リルケかぶれの文学少年だった私は、居丈高な調子で、「なんだいあんなセンチな歌!」と決めつけてはばからないのだった。

今そのときのことを思い出すと苦笑がこみあげる。いい気なもんだったと思う。何も知りもしないくせに、と思う。しかしまた、「われ泣きぬれて 蟹とたはむる」なんて詩句を、十六歳の十分に感傷的だった私が必死に拒否したこともよくわかる気がする。私は多くの少年なみに感傷家だったが、それをよくよく恥じてもいたから、こういう詩句を眼にただけで、自己嫌悪に類する嫌悪感が全身を走るのだった。私には啄木の歌のもっと別の面はまだとても読みとれるものではなかった。

啄木について書くこうとすると、まずそういう思い出についてふれなくては話が始まらない気がする。どんなに幼稚だったにせよ、私はとにかく最初は啄木嫌いだったのだから。

もちろん、そのころ私が啄木の「食ふべき詩」や「時代閉塞の現状」を知っていたわけではない。「ローマ字日記」その他の日記を読んでいたわけではさらさらない。私が旧制高校に入っただけで、その翌年から翌々年にかけて刊行された石川正雄編集『啄木日記』全三巻によってだった。私はまた啄木の『あこがれ』その他の詩篇

も知らなかった。『呼子と口笛』の一篇「飛行機」だけは、あるいはどこかで読んでいたかもしれないが、その程度では読んだことにはなるまい。つまり私が知っていた啄木は『一握の砂』と『悲しき玩具』の啄木に限られていた。私は中学時代、少しは短歌の形で自分の感情を表現することを試みたけれど、たちまち詩の方に転じて短歌を捨てたばかりだったから、『一握の砂』も身を入れて読んだはずはなかった。

少年期・青年前期の本の読み方というものは身勝手なものである。私の場合、啄木との最初の出会いはすれちがいめいていたわけだが、ただ寮の窓ぎわに倚って、夕暮のひととき議論したことの記憶がいまだに鮮明に残っているという事実は、啄木を勢いこんでくさした自らの言い分に、私が何かしら後ろめたさを感じていたからではないかと思う。

そして実際、その後読んだ啄木は、『一握の砂』や『悲しき玩具』を筆頭に、面目を一新して私に自説の撤回を迫ることになった。

もっとも、私は啄木の小説を読んで感服したことはほとんどない。啄木の小説的野心も文才も工夫も認めるけれども、出来あがった作品自体からはあまり深い感銘を受けたことがない。その原因のひとつは、彼の小説がほとんど常に尻切れとんぼのまま終っている点にもあるが、それだけでなく、作者としての彼が自作の作中人物と付合うその付合い方に落着いた味わいが欠けていることが、私の読後感をしらじらとさせるものらしい。何といっても啄木はまだほんとに若かった。

彼は一九〇八年末、東京毎日新聞に連載小説「鳥影」を書いたが、その「付記」にいわく、「こ

の一篇は作者が新聞小説としての最初の試作なりき。回を重ねる六十回。時歳末に際して予期の如く事件を發展せしむる能はず、茲に一先づ擱筆するに到れるは作者の多少遺憾とする所なり。他日若し幸ひにして機会あらば、作者は稿を改めて更に智恵子吉野を主人公としたる本篇の続篇を書かむと欲す。」

「予期の如く事件を發展せしむる能はず」という弁解に、啄木の無量の口惜しさがこもっているのが感じられる。待ちに待った小説の注文がやっときて、勢いこんで執筆したにもかかわらず、彼は登場人物をふやせばふやすほど作品が平板なものになってゆく不如意、不面目を思い知らされねばならなかった。作中人物たちは、時の経過と共に人間としての厚味や深さを増してゆくという具合にはならず、したがって小説の腰も据わらず、作者が焦れば焦るほど人物たちは薄手の会話を喋りまくったり、むやみに涙ばかり流したりということになるうちに、二か月の連載期限が来てしまったのだらうと想像される。

彼が最初に書いた小説「雲は天才である」の場合にも似たような欠点はあって、これまた途中で投げだされている上に、ところどころ作者が読者に先立って面白がっているの書き方が目立つため、じっくりひとつの小説を読んだという感銘は与えられない。「雲は天才である」は一九〇六年七月に初稿が書かれた作で、執筆動機の一つは島崎藤村の『破戒』を読んで刺戟を受けたためとされている。この時啄木二十一歳。彼はその前年に詩集『あこがれ』を出して一部に高い評価を得たが、父石川一禎の宝徳寺住職罷免事件がその直前に生じたため、一家の生活は一朝にして崩れ去り、中学時代からの恋人堀合節子との結婚ということがこれに重なったため、啄木

は今までの親がかりから、一朝にして両親や妹を養わねばならない立場に立たされた。しかも彼は中学の中退者である。そういう不安定な立場の二十一歳の青年が、己れの文学的天分に生活を賭けようと思えば、小説家として世にうって出ようと考えるのは自然だった。

当時の啄木の眼には、『あこがれ』の出たのと時を同じくして、『吾輩は猫である』を書いて一躍有名になり、『坊っちゃん』『漾虚集』『草枕』などをたてつづけに発表しはじめていた夏目漱石が、一種のライヴァルとして映じていたことはたしかなようで、「夏目氏は驚くべき文才を持つて居る。しかし『偉大』がない」などと明治三十九（一九〇六）年の日記の一節に書いている。二人とも、当時興隆してきた自然主義文学とは肌が合わず、多分に浪漫的な資質と文学観において共通していた上、啄木が『あこがれ』で示したようなきらびやかに重畳する修辭への好みは、初期の漱石の小説にもまた見られるところだったから、啄木が漱石のめざましい仕事の展開に注目し、ひそかにライヴァル視しても不思議ではなかった。しかし、一八六七年生れの漱石と一八八六年生れの啄木との間には二十年間の年齢の開きがある。表面的ないくつかの類似点があったとしても、二人の文学は所詮別々のものでしかありえなかった。

もし啄木が二十七歳で生を断たれることなしに、ある程度の長寿を保ちえたとしたら、彼はおそらくは成熟した小説家として、堂々たる骨格をもった小説をいくつも世に送り出したかもしれない。それはかなりありうることである。だがその場合、彼の二冊の歌集は、今日のような異常なほどの人気を持ち得たかどうかかわからない。文学作品と読者との関係は微妙である。啄木の二冊の歌集を、作者が病と貧窮のどん底で夭折したという事実と切離して読むことは難しい。歌の

内容そのものが深くそれとかかわっているからである。

2

石川啄木に関する伝記的研究は、近代の文学者中群を抜いて多く、また詳細をきわめている。生前の友人の著書としては土岐善麿の『啄木追懷』や金田一京助の『石川啄木』が早い時期の重要な文献だが今はほとんど手に入らない。ただ金田一京助の啄木追想の諸文は、何度も手を加えられたのち角川文庫の新訂版『石川啄木』に集められている。金田一氏は言うまでもなく啄木の盛岡中学時代の上級生であり、啄木上京後は生活面で親身に彼の面倒を見るとともに、同宿者として、ある期間は日夜啄木の話相手であった人だから、その回想録は生彩に富み、重要な証言が多く盛られている。

こういう旧友の追憶記が啄木研究の基礎を作ったわけだが、その後吉田孤羊をはじめとする学者たちによる伝記研究は、おどろくべき詳細さをもって、啄木の短い生涯のすべてにわたって、まさにしらみつぶしに調べあげるにいたっている。中でも、永年啄木の実証的研究にうちこんできた岩城之徳の『啄木評伝』は、啄木の伝記ならびにそれにかかわる研究に加えて、年譜、著作年譜、研究文献目録を収め、啄木の伝記的側面を知ろうとする人にとっては必読の文献であろう。

啄木、本名は石川一^{はじめ}。一八八六年（明治十九年）二月二十日、岩手県南岩手郡日戸^{ひの}村の曹洞宗日照山常光寺住職石川一楨、その妻かつの長男として生れた。誕生の日付は戸籍面でのことで、実は一八八五年十月二十七日の誕生という説もある。母かつは、当時禅僧の妻帯が公認されてい

なかったため入籍しておらず、ために戸籍では「戸主工藤カツ長男一」として届けが出されている。姉二人、妹一人。男子は啄木一人だけだった上、病弱でもあったため、両親に偏愛されて育った。七歳の時、母が石川家に入籍、以後工藤姓から石川姓に変わった。

渋民尋常小学校を首席で卒業、盛岡市の母方の伯父の家に置いてもらい、盛岡高等小学校に入學、三年間をきわめて優秀な成績で修了し岩手県立盛岡中学に進んだ。旧南部藩の子弟が多く学ぶ盛岡中学には軍人志望者が多く、ナポレオン好きだった啄木も、海軍士官を夢みて二級上の上級生及川古志郎（のちの連合艦隊司令長官）の影響を受けた。及川は当時壮士風の詩や歌で注目を集めていた『東西南北』『天地玄黄』の詩人と謝野鉄幹を愛読していたため、これがきっかけになって啄木の文學熱がめざめる。及川のすすめで、すでに鉄幹主宰の新詩社の社友となっていた及川の同級生金田一京助とも知合い、後年の密接な交友がここに始まった。金田一に借りて一九〇〇年四月創刊された『明星』を読み、鉄幹、晶子に心酔し、やがてみずからも新詩社の社友になる。

啄木は一八九九年、長姉さだのとつぎ先である義兄田村叶の家（盛岡市内帷子小路）に下宿したが、近所に私立のミッション・スクール盛岡女学校に通う音楽好きの少女堀合節子がいて知合いとなり、やがて相愛の仲となった。節子は一八八六年十月十四日生れ。啄木が明治の文學者としては異例なほど音楽に興味をもっていたことは、ワグナーに対する熱中ひとつとっても明らかだが、この音楽熱には恋人からの影響もかなり強かったものとみられる。処女詩集『あこがれ』を出したころ、父親一禎の住職罷免事件が生じ、在京中だった啄木が懊悩しつつ故郷に帰ったとき

のエピソードに、こういう話がある。

「何れにしろ、詩集を出して、久々で帰ることだから、今度の帰省には、そこばくの金子きんすを懐ふくにして、とまではよし行かなくとも、せめては愛人にだけでも、あつと喜ばせる程の手土産ぐらゐは欲しかったに違ひない。後年与謝野さんに伺ったところによると、定めし旅費に困りはせぬかと、無いところから、無理をして十五円ほどを賤別として出したら、けろりとして、それで愛妻への土産に、ヴァイオリンを買って来たには一驚を喫したものだつたという。

（そう云えば、帰ってから、あれ程の窮乏の中に、どこを風、とばかりに、始終ヴァイオリンが鳴っていたものだつたわけが解る）」（金田一京助『石川啄木』）

創作「雲は天才である」の、多分に啄木自身をモデルにしている主人公、理想家の熱血漢である代用教員新田耕助が、S——村（茨民村）小学校の教え子（小説中ではいみじくも「ジャコビン党员」と形容されている）たちのために作詞作曲した歌をうたわせ、それがきっかけで校長や首座訓導（教頭）と対立することになるひとつのエピソードも、ここで思い合わされる。

「詳しく説明すれば、実に詰らぬ話であるが、問題は斯うである。二三日以前、自分は不図した転機マキから思付いて、このS——村小学校の生徒をして日常朗唱せしむべき、云はゞ校歌といった様な性質の一歌詞を作り、そして作曲した。作曲して見たのが此時、自分が呱呱の声をあげて以来二十一年、実際初めてであるに關らず、恥かし乍ら自白すると、出来上つたのを声の透る我が妻に歌はせて聞いた時の感じでは、少々巧い、と思はれた。今でもさう思つて居るが……。妻からも賞められた。その夜遊びに来た二三の生徒に、自分でピアノを弾き乍ら教へ